

沼田眞先生と自然誌博物館

大場 達之

千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

E-mail: ohba@ec.catv.ne.jp

千葉県立中央博物館の設置に尽力され、初代館長を1989年から1998年3月まで務められた沼田眞名誉館長が2001年12月30日、逝去された。享年84歳であった。

沼田先生には1962年ころ日本生態学会関東地区会の大会でお目にかかったのが最初かと思う。研究の分野は少し異なるので、やや距離を置いたおつきあいであったが、視野が広く生態学以外の様々な分野に関心を持ち、研究の成果に応じて、弟子以外の研究者でも正当に評価して励まされるお姿に感銘を受けることが多かった。1970年ころから自然保護関係の調査が盛んに行われるようになると、アドホックに個性ある研究者を一本釣りして、独特な沼田チームを結成して調査に当たられた。私もそのいくつかに参加させていたが、真夏の猛烈に熱い小笠原で、漁業組合のプレハブに雑魚寝しながらの調査などは、未だに鮮明な記憶として残っている。このような自然の中で調査に勤しまれる沼田先生の強靱な体力を目にしていただけに、また日頃うらやましくらいに健康な姿に接していた故に、ご逝去はあまりにも急であったとの思いが深い。

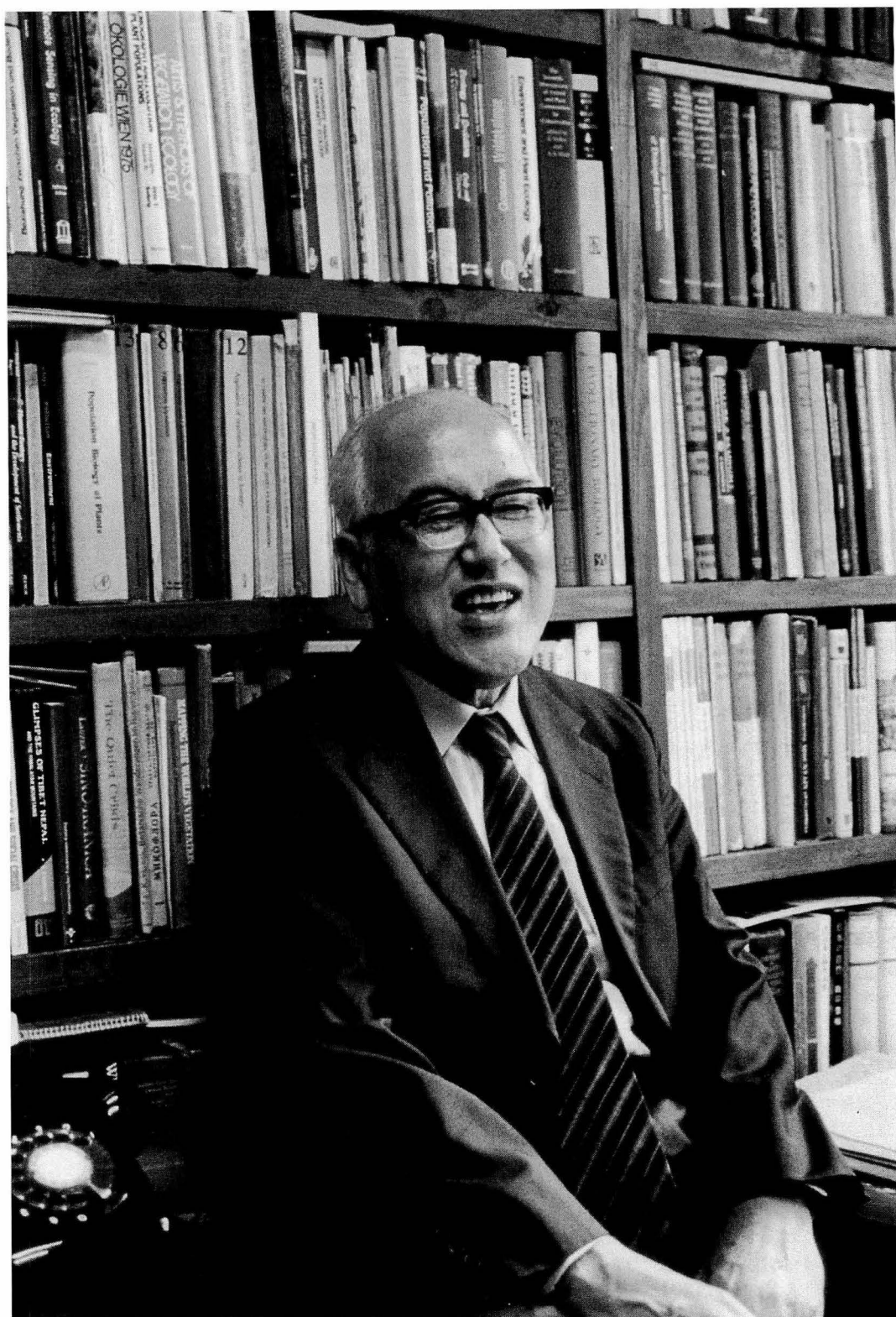
沼田人脈の末席に侍っていた故にか、1988年の春に千葉県立中央博物館開館準備を手伝えという電話をいただくことになった。私は丁度、神奈川県植物誌1988を9年がかりで完成させた直後で、次の目標を模索していた時でもあり千葉にお世話になることになった。千葉にくると、沼田先生は、中央博物館の立ち上げと、神奈川県植物誌に勝るとも劣らない千葉県植物誌の編纂を頼むと申された。県の植物誌と簡単にいっても、神奈川県2倍の面積を持つ千葉県の植物誌を編纂するのは容易なことではない。植物誌については生返事しか出なかったが、次第に沼田先生が植物誌にかける執念のようなものがまわりに立ちこめてきて、とうとう本腰を入れざるを得ない状況になってしまった。

沼田先生のお話によると、学生の頃、植物生態学を進めるには植物の種類がわからなければならないと考えられ、牧野富太郎博士の所に弟子入りを志願し、大学生には教えないという牧野博士を押し切って植物を学んだという。若き日の沼田先生は生態学の理論を強

力に展開されたが、自然誌に対する素養の深さが、それに格別な深みを与えていたと考える。鈴木時夫博士などと計って1947年に千葉県生物学会を創設され、1958年には「千葉縣植物誌」、1975年には「新版千葉県植物誌」を刊行された。沼田先生の植物誌に対する肩入れはただならぬものがあつたのである。沼田先生はまた植物誌に限らず、地域の自然誌調査、自然保護に対して膨大な努力を傾注された。それは千葉県から刊行された多量の調査報告書を見れば明らかである。グローバルな研究とともに、自らのよって立つ地域の、ローカルな自然研究にも同じように力を注がれた。最近のグローバル業績一辺倒の若い研究者の葉にしたい話である。

沼田先生は“この2回の植物誌編纂で採集された、証拠となるべき標本の保管場所がみつからずに残念な思いをしたのが県立の自然誌博物館建設への最大の原動力となった”と、ことあるごとに話されていた。また先生はタケ・ササ類に興味を持ち続け、生態学的な研究を行うとともに、海外に出られた時には主要な大学や博物館の標本庫を訪れ、タケ・ササ類のコレクションに目を通されていた。研究者に開放された自然誌資料の蓄積が自然誌研究に、ひいては生態学の研究にも欠かせぬものであることを、先生は海外の巨大ハーバリウムでの体験から痛感されていたのである。沼田先生は歴代の千葉県知事に、県立自然誌博物館の設立を要望し続け、ついに県立中央博物館の設立にこぎ着けられた。中央博物館の準備が始まると、先生は弟子筋の人々、とくに千葉県生物学会の主立った人々を動員して、県内の植物標本の収集につとめられた。また千葉県の植物調査の先駆者たちが残した標本の入手にも努力され、与世里盛春、若名東一氏などの標本が、新設の中央博物館の標本庫の基礎として導入された。

それらの資料が、千葉県の植物相の解明上いかに重要であるかは、現在編纂中の新々版千葉県植物誌に引用されている標本を一覧すれば明らかである。県立中央博物館が設立されると沼田先生は新々版千葉県植物誌の編纂に向けて着々と手を打たれた。その一つが千葉県史編纂事業の中に自然誌系を盛り込むことであった。私もそのお手伝いをしたが、傍観者からすれば強



自宅書齋での沼田眞先生。撮影年不明。沼田家蔵。

引とも思われる強力な手腕でそれに成功された。県史自然誌系はすでに7冊が刊行され、いずれも高い評価を得ていることは周知のことである。

このように千葉県植物誌と千葉県立中央博物館は沼田先生と切っても切れない因縁に結ばれている。中央博物館開館15年を控え、いまや千葉県史自然誌系の別編として新々版千葉県植物誌の編纂が最後の段階に至っている。これまでにないユニークな植物誌として最大限の努力を傾けたが、沼田先生のお気に召すか否か。ご存命中に完成できなかったことは、返す返すも残念である。

環境問題は21世紀最大の課題になるであろうといわれている。地球上のそれぞれの地域の自然環境保全の全体が地球の環境を守ることになる。そのために千葉県立中央博物館は、千葉県の環境保全の基礎として、自然のデータベースとして機能することが求められよう。開館以来の中央博物館の活動が、それに対して十分であったか否かを深く省みて、これからの活動の方向を確立すべきであろう。

また沼田先生の研究の一方の柱であったところの、世界に通用するグローバルな研究の展開も、中央博物館において同時にレベルアップすべき課題である。北マリアナ調査やリネー（リンネ）関係レンスコーク・コレクションの入手など、将来につながるステップの

先に、どのような展開があるのか、沼田先生の期待に応えうるような中央博物館の将来を望みたい。

沼田先生は膨大な論文、著書を生産されたが、大学や、さまざまな団体の役員、会議の委員などを重任されながら、あれだけの知的生産を挙げられるには、何か秘訣があるかと思って、あるとき伺うと、別に秘訣はなく、毎日やすまず仕事をして、夕刻は食事の後、テレビでも少し見て9時か10時までには寝てしまうと申された。それが健康のキポイントであったのかと思うし、思い返せば、汽車のなかでも、船中でも、常に何かを書き、またさまざまな事柄を丹念にメモに取っておられた。仕事をためてしまって徹夜で片づけたりする自分の集中法に対し、沼田先生はコンスタント法である。ウサギとカメにたとえればカメの方であったが、速く歩くカメであった。また論文を書いてお送りすると即刻礼状が届くのも驚きであった。もっとも独特の流れるがごとき書法で、読むのに苦労したが。

迅速なレスポンスによる広範な人との交流、頻繁な海外旅行による広い知見、膨大な蒐書、プリニウスやゲーテ、フンボルトに対する関心、科学史と哲学への造詣、自然保護への寄与など、沼田先生は“仰ぎ見る巨人”であった。